僕と魔法と学校と

Microsoft

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と魔法と学校と

【Ｎコード】
Ｎ６０１４Ｎ

【作者名】
Ｍｉｃｒｏｓｏｆｔ

【あらすじ】
柳井埜臼は人付き合いが苦手だ。

しかし、学校の仲間との生活のうちにそれを克服する。
そして、自分がこうなってしまった過去を思い出してしまう……

魔法あり！友情あり！恋愛あり！　のファンタジー学園小説です

入学（前書き）

新たに連載しました。

これから宜しくお願いしますｂｙＭｉｃｒｏｓｏｆｔ

入学

僕、柳井埜臼（やない　のうす）は今、たった今、魔法第一高校の入学式に参加していた。新入生としてである。

入学式は重苦しい雰囲気で皆押し黙っている。新入生は全員用意された椅子に出席番号順に座らされていて、担任となる人物に名前を呼ばれると「はい」と軽く返事をして席を立ち頭を下げる。その繰り返しであった。僕の順番はとっくに終わり、今は、パブリコＢ組が呼ばれている。

ちなみに、僕はパブリコＡ組である。

順を詳しく言うと、エクセルＡ，Ｂ，Ｃパブリコ　Ａ，Ｂ，Ｃの順番だ。

エクセル、パブリコとはクラスの事であり、入試での成績優秀者はエクセルへ、合格ラインを超えているだけの生徒はパブリコへと振り分けられる。

ちなみに、僕の入試の成績というと……

受験者内順位５００／１５００　合格者順位５００／５００

つまり、この新入生の中では僕の成績は最低ということになる。

入試は一般的な魔法の応用の実技と魔法の仕組みや基礎等を試す筆記試験がある。

僕は実技がからっきしであった。筆記は自分ではあまり得意だと思っていないが、よくそれは嫌味だ！とか叫ばれることがあった。

はっきりいって入学出来るとは思っていなかった。この高校はここらにすんでる天才やある程度の地位を持っている家の息子がやってくるようなところである。

それ故にハードルは相当高い。

しかし、メリットもあり、ここへ入学出来れば安定した将来が望めるのは確かだった。

それにつられて僕はこの高校を、受かれば万々歳程度で受験した。

――――寝ずに勉強をしている人もいるのに、遊んでいた僕が受かってもいいものだろうか……

そんな疑問が心の中に渦巻いたがすぐにそれを否定する。
僕は、実力で受かったんだ。ここで、堂々と生活をしてもいいはずだ。
５００／５００だけどね。
しかし、ここで気を緩めていてはだめなのだ。
普通の高校と違い、ここでは半年に一度、退学テストというものがある。
これは、生徒の向上を図るためとされているが、実際は生徒が少ないほうが楽だからという噂もある。
このテストで悪い点数を取ればエリートコースはない。

入学式を終えた新入生たちは地図を頼りに各々の教室を探す。
僕は、パブリコＡ組なのでその教室への道を目で辿る。
うん。すぐ近くだ。
２分ほど歩き、僕は扉の前へ待つ。
すぐ近くといってもこの学校は広いので移動には時間がかかる。
まぁ、移動に１０分を費やす一番遠いエクセルのＡ組よりかは断然ましなのだが。
そして、扉を開ける。
僕は少なからず驚いた。
いくらこの高校でも将来を渇望されるエリート集団のエクセルとは違いパブリコの僕は普通の教室だろうと思っていた。
しかし、その考えはすぐさま否定される。

広い。
その一言しかでない。簡素な作りなのだが、ともかく広かった。
普通の教室の5倍はあるだろうか。
生徒１００人がねそべってもゆったりできそうであった。
魔法第一高校恐るべし。
あまり扉のところにたっていると人目を引くのでとりあえず中へと入る。
そこにはもう５０人ほどの生徒が席に座っていた。
僕は、この高校にくるさいに配布された、小型モバイルパソコンをバッグからとりだし、起動させる。
ウィンドゥにはメールが届いていると知らせがあった。
メールボックスを開くと、学校より　というメールが１件入っていた。

“パブリコＡ組の皆様へ

こんにちは。魔法第一高校校長の霧生雹です。
校風は気に入っていただけたでしょうか？
我高校は皆様に心地よく勉学に励めるように快適な空間を用意させていただきました。
さて、座席なのですが、我高校では座席は自由としております。
お好きな席へどうぞ。

まずは、担当の先生から挨拶があるかと思うのでこの辺りでおいとまさせていただきます。”

座席は自由ということなので、僕は後ろのほうへ座る。
前のほうには、この高校から退学にならないように勉強するために

多くの生徒が既に座っていた。
僕は、別に一生懸命勉強しようとは思わないし、人の多いところはあまり好きではない。
故に、あまり人と関らないようになっていたので友人と呼べるのは今までの人生経験で片手の指よりも少ないだろう。
ひとまず、担任の教師を待つ。
その間は配られたモバイルｐｃを弄る。
なんと、インターネットが使えた。
しかも、驚くほどに起動が早いのである。
軽快にキーボードを叩く。
僕は、今気に入っている「小説・ｃｏｍ」とうサイトを開く。
あまり、人との関りを持たない僕にとっては本は友達といっても良かった。
このサイトではいろいろな小説が公開されていて、読んでも読んでもドンドン更新されて飽きない。正に夢のようなサイトだった。
この間など、つい時間を忘れて１日中サイトを開きっぱなしだったこともある。
止めよう、止めようと思っても僕の好奇心がそそられ、ついつい読んでしまう。
正に今もその瞬間だった。
まえまえから更新を楽しみにしていた小説が更新されていた。
周りの目等気にも留めずに読み漁る。
――――ハッと気づけばほとんどの席は埋まっていた。

「随分集中していたのね」
と笑いを含んだ声で話しかけられた。
首を横に向けると、僕の隣にはいつの間にか女子が座っていたことに気づく。
一言でいえば、美人だ。
後ろをポニーテールにしてちょっと茶色っぽい髪、明るく活発な雰

囲気が漂っている。
「…いえ……」
自分で自分が嫌になってしまう。いつも、こうであった。
会話が続かない。何を話したらいいのか分からなくなってしまう。
僕は、いつからこうなってしまったんだろう……
「結構格好いいじゃん。勿体無い」
格好良いか……
何故、自分は好かれてしまうのだろうか？
この容姿のせい？　なら親を恨む。
人付き合いが苦手な僕は、告白というものが一番厄介である。
どうしたらいいのかわからなくなってしまい、逃げ出してしまう。
小学校の頃も逃げてしまい、次の日からは冷たい目で見られてしまった。
「そうですか……」
「もっとシャキッとしなさいよ！　君、名前は？」
「…柳井埜臼です……」
「ふ～ん、珍しい名前ね。私は、椎名朱莉よ。これから、宜しくね」
「……はぁ……」
その後も、朱莉は担任が来るまで僕に質問をしたり自分の事を話したりして、やけに絡んできた。
それを、心の隅では鬱陶しいと思いながらも、久しぶりの会話らしい会話に懐かしさと楽しさを感じていたりもしていた――――

入学（後書き）

主人公の名前はテケトーです（ぁ

最悪な過去（前書き）

こんばんは。Ｍｉｃｒｏｓｏｆｔです。
忙しくてこの機を逃すと次は何時投稿できるかわからないので急いで仕上げました。

「……それでは、これで終了します。今日はこれで終わりなので帰って結構です」

そういうと、その女性はドアを開けて出て行った。

今までの話を簡単に言うと、挨拶から始まり、自己紹介に始まり授業についてだとか、校内案内だとかそんなことだった。

ちなみに、担任の名前は、坂口理恵というらしい。目ためはおばちゃん。そこら辺の弁当屋さんにいそうなタイプ。でも、実年齢は２４らしい（自称）まぁ、どうでもいいけど。

担任と言っても僕たちに授業をするわけではないので、ＨＲのとき意外は接点は無くなる。

それに、今の話は学校のパンフレットに載っていて僕はそれを何度も読んだので

担任が言っている事は右耳から入って全て左耳から出て行った。

退屈でしかなかった時間はようやく終わり、生徒たちはため息とともに席を立ち

上がる。

早速、声をかけて友達を増やすものもいれば、僕のようにそそくさと帰ろうと準備をしているのもいた。

特に配られたものも無かったので、僕は荷物を纏めて席を発った。

誰にも見つからないように、静かに、地味に。

ドアへと向かう。

よし、無事に帰れ……
「ちょっと待った！！」
なかった。
振り向くと、そこには予想通りの人物が立っていた。
ポニーテールの美人、椎名朱莉。
まぁ、さっきも会話はしたから朱莉には悪いイメージは抱いていない。
それはいいとして、隣に立っている女子は誰だろうか？
メガネをかけた大人しそうだが、中々顔は整っていて、いわゆる隠れ美人という
やつだろうか？
「何か…用ですか……？」
「何か用ですか？　じゃないわよ！　全く。」
と、怒気をふんだんに含んだ声で怒られた。
しかも、隣の隠れ美人は泣きそうになってるし。
僕、何か悪いことしましたか？
と聞きたくなったが僕の本能が危険を察知しているので言わない。
どうしていいか分からずしどろもどろしていると、朱莉がニヤッと笑って口を開
いた。
「ぁ、隣にいるのは優ちゃん。さっき知り合った子なんだけど、何か埜臼のこと
がき……」
「あっあっあのぅ！　私は、白井優っていいます！　よ、宜しくお願いしますっ！」
と、朱莉が何か言おうとしたところを遮る様に挨拶をしてきた。
「……はぁ」
気の無い返事をして自分でも何処をみているかわからないぐらいボーッとする。
暫く無言の時間が続くと、いきなり、

「ご…ごめんなさいっ！　やっぱり私なんて駄目ですよね！！　ごめんなさい、ごめんなさい！！」
そういうと、顔を真っ赤にして俯きながら優は脱兎のごとく教室を飛び出ていった。
突然の優の行動に驚いた朱莉は、
「ちょ、ちょっと待って！」
といって優の後を追いかけて教室を出て行った。
結局、何がしたかったんだろうか……？
まぁ、どうでもいいけど。
僕は、荷物を持って教室を後にした。
廊下は始業式らしくガヤガヤと賑わっていた。僕は、人ごみを掻き分けて目立たないように校門へと向かう。
ドンッと全身に衝撃が走った。
今日は厄日かな？　朝の占いは乙女座９７点だったはずだったんだけど。
「いってぇな！　気をつけろ！！」
左胸を見ると、エクセルＡ組だということをしらせるクラス章が付けられていた。
はぁ、面倒くさいとは思ったが、
「気をつけろ！　っていったってそっちがぶつかって来たんじゃないか！！」
とは言えず、ただ、
「……はい、すいませんでした……」
と謝って帰ろうとしたが次のあいつの言葉が僕を怒らせた。
「ったく、ウジウジしてて気持ち悪いんだよっ！」
そいつは笑いを含めた声で僕を嘲笑った。
そこからの記憶はもう無かった――――

気がつけば、僕を中傷したあいつは床でのびていた。白目を剥いている。
あぁ、またやってしまったんだな――――
僕が周りを見回すと皆呆然とした表情を恐怖に変える。
そして少しづつ後ずさり僕から逃げていく。
――――ねぇ、何で僕から逃げるの？
――――僕を一人にしないでよ……
意識が混濁して何も考えられなくなる。
ドサッという音が耳に入ったけど、僕は何も感じなかった。
夢を見た――……
僕が小さい頃の夢。僕が心の奥底に鍵を何重にもかけて封印した思い出。
でも、何重にも鍵をかけたのに夢の中でだとその鍵は全部外れてしまう。思い出したくないのに、頭の中で再生される。
――――「きめぇんだよ！！　女かよおまえは、グジグジしやがって！」
小学校の頃、皆の人気者で喧嘩も強いケンちゃんが僕に向けて言った言葉。
あの時にはもう今の僕になっていた。
何を聞かれても曖昧にしか返事を返さなかった僕に遂に痺れを切らしていった言葉は、毎日毎日言葉の暴力を浴びていた、低レベルなイジメにも傷心していた僕はこれで理性を失った。
記憶はどんどん薄れていき、気づいたときには先生が僕を羽交い絞めにしていた。

必死に宥める様な言葉を浴びせかけている。
目の前には血だらけになって倒れているケンちゃん。
硝子が割れていた。僕の両手には何も握られていない。生まれて初めて使った魔法は、

最低だった。

何度も見た夢。でも、この夢ほど後味が悪く不快な夢は無い。
もう、見たくない。そう思っても見てしまう夢。

思い出を削除してしまいたい。
本気でそう思った。

最悪な過去（後書き）

感想、アドバイス等心よりお待ちしております。

会長はお気楽（前書き）

更新遅れました。
Ｍｉｃｒｏｓｏｆｔです。
中々執筆だ出来なくてかなり遅い更新となってしまいました。
申し訳ありません。
しかし、ちゃんと続けていくのでこれからも宜しくお願いします。

会長はお気楽

気がつけばば僕はベッドに横たわっていた。
あたりを見回すと様々な医療器具、ベッドが2台、デスクが一つとそれだけで、ここは医務室だという事が分かった。
……僕は如何してしまったんだろう？
覚えていない。
何も覚えていない。
何があったのか全然分からなかった。
僕はそう信じ込む。例え、それが嘘であったとしても、だ。
埜臼は自分にそう言い聞かせベッドからゆっくりと起き上がる。
傍には誰もいない。部屋を見回しても生き物の気配はなかった。
ドアに手をかけて部屋を出ようとする。
本当ならばそこには廊下が見えるはずなのだが、今は見えない。
代わりに見えたのはこの学校の制服を身にまとった女性の顔だった。
身長は僕より少し低く、若干上目遣いでこちらを見てくる。
中々整った顔立ちで髪も短めにしてあるので
何処と無くボーイッシュな感じがした。
髪は黒だがそれに似合わぬ目の青色。
暫くすると向こうから声をかけられる。
「来て下さい。生徒会長がお待ちしています」
声のトーンは低く、機械のように感情が篭ってなかった。
彼女の表情、瞳からは何も伺えない。
彼女の口からでた、＞生徒会長＜という言葉。
生徒の中で一番権力を持っている人物が新入生の僕に何のようだろうか？
不思議に思いながらも僕は何もいわず頷き、肯定の意を示す。
その合図を見て、彼女は僕に背を向けスタスタと歩き出した。
僕もその背中を追って彼女の後ろを歩いていく。

もちろん、会話は何も無い。
しかし。別にそんな時間を苦痛には思わない。寧ろ、色々と聞かれるのは好きではないので都合が良かった。
階段を降りる。
はて、此処は何階なのか？
まだ、初日なので無論、この学校の構造は理解していないうえに、普通の学校の何倍もある広い校舎は暫くしないと慣れそうも無かった。
階段を降りる。また降りる。降りる。降りる。
そして降りて、止まる。
一体何回降りたのだろう？
見た目は3階建てのはずだけど。
埜臼達が今いる場所は何かひんやりとした寒々しい雰囲気の階だった。
窓も無く、ただ廊下が広がっているだけというイメージが強い。
そうこうしてる間にも彼女はズンズンと突き進む。
まるで、埜臼の存在そのものが無いかのごとく。
そして、立ち止まった。
それにあわせて僕も立ち止まる。
彼女はこちらを振り向き、ジッと見つめてくる。
相変わらず何を考えているのかはわからなかったが、僕の左にある部屋に入れと促しているようだった。
僕は頷く。
ドアに軽くノックをし、向こうの返事を聞かずに扉を開ける。
「失礼します」
一応、挨拶だけはしておこう。
「ぱんぱかぱ～ん！！」
変てこな掛け声とともに楠球が頭上から降って来る。
うん。開かないで降って来たのだ。
しかも、脳天直撃。

どうやら僕は来る場所を間違えたらしい。
なぁ～んだ、なら彼女もいってくれればいいのになぁ。
ドアに手を掛けて廊下へ出ようとする。
「え、あ？　ちょ、ちょいまち！　待って！　ＳＴＯＰ！　メイト！」
廊下を出ようとする瞬間、後ろから慌てた声で呼び止められた。
どっちかと止まらされた。
「……非常識ですね」
「いや、非常識じゃなくって君がいきなり出るのが悪いんでしょ！　ほら、こっち来て」
拘束魔法が解かれて体が自由になる。
「良い子良い子。私の名前は宮園鼎（みやぞのかなえ）。生徒会長ですよ！　えっへん」
と胸を張っていばる。
はっきりいって子供だと思う。
身長も１４０そこそこかなさそうだし、童顔だし。
まぁ、どうでもいいけど。
「……はぁ」
「反応薄っ！」
いや、薄いとか言われても困るんですが。
「まぁ、いいや。今回君を呼んだ理由は一つ。君の暴力事件について」
……やっぱりか。
まぁ、将来有望のエクセルＡ組の生徒を魔法で気絶させてしまったんだから、それ相応の覚悟は必要だろうな。
入学早々で問題起こすのは嫌だったのに。
目立たないようにしようと思ったのに。
埜臼の心にはどんよりと曇り空がかかった。
「停学ですか……？　退学ですか……？」
まぁ、どっちかは確実だろうな。
「うん。処罰についてなんだけどね。今回は不問にします」

今、なんていった？
不問っていったのか？
いや、聞き間違いだろう。相手に怪我はさせてないとはいえ、暴力をふるったことには変わりは無い。
「聞こえなかった？　不問よ。もう相手側から事情聴取はして、大体の経緯は把握したよ。むこうも、反省しているらしいから」
随分と寛大な処置だなぁ。
それに、あいつが反省？どうせ、見せ掛けだろう？嘘の塊じゃないか。
憤りを感じたが、下手に発言して事態を大きくする事だけは避けたいので言わないでおく。
「……有難うございます」
「うんうん。流石私！」
何処がどう流石なのか１００文字以内で答えてください。
「んじゃ、話は終わり。帰ってもいいよ。私も疲れたし」
疲れたって話をしただけなのに……
僕は、失礼します、と挨拶をして帰ろうとしたが、何か気配を感じる。
後ろを振り向くと、ふぁーとかいって机に突っ伏してる生徒会長。
と、ここまで僕を連れてきた彼女。
「……あの、何か？」
声を掛けてみるが反応は無い。僕はため息をついて、廊下に出た。
そして階段へとつくと、登り始めた。
しかし、一向に１階へはつかない。
……どうなってるんだ？
「無駄」
突然後ろから無機質な抑揚の無い声が聞こえてきた。
「…無駄……とは？」

会長はお気楽（後書き）

林間学校に出かけるので次の更新は来週末になると思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6014n/

僕と魔法と学校と

2011年10月7日16時12分発行